

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：42648

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K17407

研究課題名（和文）保育者養成カリキュラムの開発と実践に関する日米間の比較教育史的研究

研究課題名（英文）A Comparative Historical Study of the Development and Practices of the Early Childhood Educator training Curriculum between Japan and the United States

研究代表者

永井 優美（Nagai, Yumi）

東京成徳短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：30733547

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、比較教育史的視点によってアメリカの保育者養成カリキュラムの開発と実践が日本のそれに与えた影響について検討することを通して、日本の保育者養成の史的特質を考察した。その結果、戦前日本の保育者養成がアメリカのそれから多大な影響を受けながらも、異なる様相を呈しており、それは現代日本においてもみられる保育者養成の普遍的な課題につながるということが明らかとなった。アメリカと比較した上で日本の保育者養成の諸問題の根底にあるのは、保育者は専門職であるという意識の希薄さと幼小連携を視野に入れた教員養成の不備である点を指摘した。幼児教育の質を高めるためには、この点を意識した保育者養成改革が必要であるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果により、戦前日本の保育者養成の特質が明らかになったほか、現代の保育者養成の諸問題との関連では、保育者の待遇や社会的地位の低さの要因は歴史的な側面からも検討する必要があることを指摘した。また比較教育史的視点を有することで、国際的な潮流の中で日本の保育者養成がどのように位置づけられてきたのかを明らかにすることができ、世界水準の保育者養成を実施する上での基礎的研究を提供した。今後、日本において、幼児教育の成功の鍵は保育者養成にあることを認識し、即戦力としての保育者ではなく、専門職としての保育者を育成しようとする意識を啓発することの有効性を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study examines the historical characteristics of early childhood educator training in Japan from a comparative educational historical perspective by examining the influence of the development and practice of American early childhood educator training curriculum on that in Japan. As a result, it became clear that while prewar Japanese early childhood educator training was greatly influenced by the U.S. curriculum, it had different aspects, and that this led to universal issues in the training of early childhood educator that are also seen in contemporary Japan. Compared to the U.S., the underlying problems in Japanese early childhood educator training are a lack of awareness that childcare is a profession and inadequate teacher training with a view to cooperation between kindergartens and elementary schools. In order to improve the quality of early childhood education, it will be necessary to reform the training of early childhood educator with this in mind.

研究分野：幼児教育史

キーワード：保育者養成 幼児教育 アメリカ幼児教育史 受容史 キリスト教保育 幼児教育史 保育カリキュラム 保育実践

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

戦前日本の幼児教育及び保育者養成は、とりわけアメリカの影響を強く受けて発展してきた（『幼稚園教育百年史』（文部省、1979年）などの通史参照）。しかし、そもそもアメリカ幼児教育・保育者養成史に関する実証的な研究は少ない。『アメリカの幼稚園運動』（阿部真美子他、明治図書出版、1988年）や『保育形態論の変遷』（橋川喜美代、春風社、2003年）などの先行研究が存在するものの、未だアメリカ幼児教育・保育者養成史の実際は、総体的にも個別事例においても十分に明らかにされていない状況である。特に、保育者養成に関する研究は少なく、北野幸子が全米規模の幼児教育専門団体である International Kindergarten Union（以下、IKU とする）における保育者養成委員会での議題について触れているものの（「転換期アメリカにおける幼児教育専門組織の成立と活動に関する研究 領域の専門性の確立を中心に」博士論文、広島大学、2001年）、アメリカにおいて保育者養成カリキュラムがいかに開発され、実践されたのかに関する研究はほとんどないを考える。

また、日本の保育者養成に関しては、佐野友恵による検定制度を中心とした一連の研究（「戦前日本における幼稚園保姆検定制度の確立」『乳幼児教育学研究』第12号、2003年など）があるが、専門職としての保育者を養成するためのカリキュラムを開発するという視点は含まれていない。そのような中、筆者は戦前日本において専門性の高い保育者を養成していた事例としてキリスト教系保育者養成機関に着目して研究を継続してきた（『近代日本保育者養成史の研究 キリスト教系保姆養成機関を中心に』風間書房、2016年）。その結果、同機関などでは、当時の日本の一般的な保育者養成に比べ、よりアメリカ的な保育者養成が行われていたことを明らかにした。それは、例えば、1916年に発表された IKU による保育者養成カリキュラムのナショナルスタンダードに関して分析し、日本においても一部先進的な養成校において、アメリカ基準の養成カリキュラムが採用されていたことを指摘したことなどである。それらの研究過程を通して、今後はさらに、アメリカの幼児教育・保育者養成カリキュラム開発と新教育運動との関連を精査し、それらの日本への影響を解明する必要があることを見出した。当時のアメリカでは新旧の教育論争が起こり、保育者養成に関しても活発な議論が行われ、特に幼小連携の観点から保育者養成改革が行われていったのであるが、その状況を分析しつつ、本研究を進める必要があると考えた。

2．研究の目的

平成 27 年度より子ども・子育て支援新制度が施行され、幼保一体化のための政策が進展を見せているが、乳幼児の教育・保育を支える保育者の養成に関する政策は立ち遅れているのが現状である。今後重要になるのは、幼保における制度や施設の共有よりも保育者の資格や養成内容の一元化であり、その総体としての保育者養成の内容的向上であると言える。本研究では、戦前期において、アメリカの保育者養成カリキュラム開発と実践が日本のそれに対しいかなる影響を与えたかについて検討することで、日本の保育者養成の特質について解明することを目的とした。このことにより、保育者養成の普遍的課題を見出し、今後の保育者養成とそのカリキュラム開発に示唆を与えたいと考える。

3．研究の方法

上記の目的を達成するため、比較教育史的手法を用いて、アメリカと日本の保育者養成の歴史的研究を進めた。特に、わが国の保育者養成がアメリカの影響を受けて発展してきたことを考慮し、アメリカの幼児教育・保育者養成情報が戦前日本にどのように伝えられ、いかなる保育者養成が行われたのかについて検討した。そのための視点として（1）1890-1930 年代のアメリカにおける保育者養成の動向把握、（2）アメリカから日本への教育情報伝達についての分析、（3）日本における保育者養成の実態についての検討、を設定した。具体的には以下の事項に関する調査を行った。

- （1）1890-1930 年代のアメリカ保育者養成の動向把握
コロンビア大学 P. S. Hill らのコンダクトカリキュラムについての検討
シカゴ大学 Alice Temple らによる保育者養成システムの構築についての分析
- （2）アメリカから日本への教育情報伝達についての分析
モンテッソーリ教育情報の受容についての分析
甲賀ふじによる豊明幼稚園における実践の特質解明
ランバス女学院保育専修部での高森ふじの自由保育思想の特質解明
- （3）日本における保育者養成の実態解明
A. L. Howe による頌栄保姆伝習所での保育者養成の特質解明
M. M. Cook によるランバス女学院保育専修部での保育者養成の特質解明
キリスト教系保育者養成校の取り組みやその連携組織 JKU の実態分析

上記の調査の成果を踏まえ、アメリカとの影響関係の中にある日本の保育者養成の史的特質

を考察した。

4. 研究成果

本研究では、アメリカの保育者養成カリキュラム開発と実践が日本のそれに与えた影響について検討するため、上述した調査を行い、比較教育史的手法を用いて、日本の保育者養成の史的特質を考察した。この視点を有することは、国際的な潮流の中で日本の保育者養成がどのように位置づけられてきたのかを明らかにすることにもつながる。

まず本研究において、19世紀末～20世紀初頭におけるアメリカの幼児教育および保育者養成に関する実態を検討し、アメリカの進歩主義幼児教育が流行する中で開発された幼小連携カリキュラムと保育者養成の関連性についてまとめた。アメリカでは幼稚園教育と小学校教育との関連が1900年代に強く意識され、幼稚園と小学校低学年の教員養成のためのコースができるなど、保育者養成における新たな価値観が浸透していった。そのような情報は日本にも移入していたが、幼小連携カリキュラム開発が一部の研究者や実践者に着目されたものの、一般に定着しなかったわが国では、アメリカのように幼小連携を視野に入れた教員養成については看過されてきたと言える。

次に、アメリカの幼児教育情報がいかに日本に伝達されたかについて具体的に分析するため、新教育の一種と認識されていたモンテッソーリ教育に関する情報の受容について研究を行った。大正新教育期に日本に初めてモンテッソーリ教育が紹介されたが、その流行の傾向を分析し、外国教育情報受容の特質について考察した。モンテッソーリ教育は大正新教育期に進歩主義教育が盛行する先駆けとなっており、幼児教育のみではなく広く教育界全体にインパクトを与えたものであったことを指摘した。さらに、アメリカに留学した後に日本で保育実践に携わった日本人指導者らの保育実践や思想について検討した。その結果、進歩主義幼児教育の思想や実践が当時の日本に部分的に移入していたことを解明した。これらの人物たちは、幼小連携や自由保育を意識していたが、それは科学的基礎にたった児童研究を通した子ども理解を行うことの重要性が進歩派に着目されていたことを受けたものであったと言える。これらの事例を通して、保育者の専門的力量として何が重要と捉えられていたのかが理解できる。

さらに、そのような力量を備えた保育者を養成しようとする日本における実践として注目してきたのが、幼児教育専門のアメリカ人宣教師たちの保育者養成である。本研究では、特に、戦前日本の基督教保育界をリードしたアメリカ人宣教師の保育者像や養成に対する意識を中心に、基督教系保育者養成の水準について質的側面から検討した。その結果、広く日本、アメリカの保育者養成の実態を比較することで、基督教系保育者養成が日本の同時代の養成レベルを超え、アメリカのそれに近いものであったことが明らかとなった。また、アメリカ保育界においても、日本在住のアメリカ人宣教師を通して日本の保育界との接点をもっていたことを指摘した。

以上の検討を主軸とし、より広く現代の保育者養成の実態の検討も重ねつつ、比較教育史研究を行った結果、わが国の保育者養成が抱える普遍的課題について、以下の2点を示すことができる。一点目は、保育者は専門職であるという意識の希薄さである。二点目は幼小連携を視野に入れた教員養成の不備である。戦前日本で本格的かつ継続的な保育者養成を担ってきたアメリカ人宣教師たちは、保育者の専門性が軽視されていた当時であっても、保育者の専門的力量を追及したアメリカ基準の養成を可能な範囲で行っていった。また、アメリカでは、幼稚園は公的学校の一部として設置され、進歩主義教育運動との関連もあり、幼小連携がはかられていった。そのため、保育者養成においても、幼小の教員養成統合の動きがあるなど、日本とは異なる特徴をもつ形で進展してきた。しかし、そもそもアメリカでは幼小の教育の質を保証するために必要なのはカリキュラム改革だけではなく、そのカリキュラムをデザインする主体である教師の養成にあると認識されていたことが重要であるだろう。アメリカに比べ保育者の専門性や養成の重要性、幼小の連携への意識が低い日本ではなおさら幼小における連続的な発達を視野に入れた教育を行うことのできる教員が少ないことは否めない。しかし、今後日本の教育において求められるのは、幼児教育から小学校教育への積み重ねであり、それを意識して教育に当たることのできる教員の養成ではないだろうか。

以上、日本の保育者養成の歴史及びアメリカの保育者養成の歴史の総合的分析、またそれらの影響関係を検討するための個別事例研究、とりわけ、アメリカと日本の幼児教育や保育者養成双方に関わりをもった人物に着目した研究を行ってきた。その結果、日本の保育者養成がアメリカのそれから多大な影響を受けながらも、異なる様相を呈していたことが明らかとなった。日本の保育者養成の歴史的に形成されてきた性質としては、幼小連携の視点が弱く、さらに保育者の専門性への理解が不足している点が挙げられよう。そのため、現代の保育者養成の諸問題にもつながることとして、保育者の待遇や社会的地位の低さの要因は歴史的な側面からも検討していかなければならないこととして指摘することができる。それには何よりもまず、幼児教育の成功の鍵は保育者養成にあることを認識しなければならない。即戦力としての保育者、使い捨ての保育者ではなく、現場で長く活躍できる専門職としての保育者を育成しようとする意識を啓発でき

るか否かが今後の日本における保育者養成改革を決定づけるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 永井優美	4. 巻 14
2. 論文標題 戦前日本キリスト教系保母養成機関における保母養成の特質 - アメリカ人宣教師の保母像に着目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幼児教育史研究	6. 最初と最後の頁 42 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福山多江子、生野金三、大澤洋美、香田健治、永井優美	4. 巻 52
2. 論文標題 主体的・対話的で深い学びの研究 幼稚園教諭養成課程における実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京成徳短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤洋美、安見克夫、福山多江子、永井優美	4. 巻 52
2. 論文標題 子どもの加減行為についての一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京成徳短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井優美	4. 巻 60
2. 論文標題 甲賀ふじのアメリカ留学と幼稚園教育実践	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本の教育史学	6. 最初と最後の頁 32 - 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井優美	4. 巻 51
2. 論文標題 大正新教育期におけるモンテッソーリ教育法紹介の傾向と特質 - 外国教育情報の移入に着目して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京成徳短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 49 - 59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福山多江子・生野金三・永井優美・大澤洋美	4. 巻 51
2. 論文標題 実践的指導力の育成を志向してー保育観の形成を通してー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京成徳短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 85 - 94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安見克夫、福山多江子、永井優美、木埜下大祐	4. 巻 50
2. 論文標題 幼稚園における学校評価基準資料の観点に関する一考察 実践的自己点検評価の基準と記述	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京成徳短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 53 - 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 永井優美
2. 発表標題 19世紀末から20世紀初頭のアメリカにおける日本の保育実践に対する認識 A. L. ハウの影響を中心として
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

1．発表者名 福山多江子、永井優美
2．発表標題 保育者養成における指導計画作成に関する一考察 アクティブ・ラーニングの形式の授業を通して
3．学会等名 日本保育学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 安見克夫、伊澤永修、大澤洋美、岡本弘子、永井優美、鍋島恵美、福山多江子、村石昭三
2．発表標題 幼児期の遊び「加減」の行為が育てる身体知の研究(2) 体験的学び「加減」行為から習得する言語感覚
3．学会等名 日本保育学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 永井優美
2．発表標題 戦前日本キリスト教系保姆養成機関における保姆養成の特質 アメリカ人宣教師の保姆像に着目して
3．学会等名 幼児教育史学会(招待講演)
4．発表年 2018年

1．発表者名 福山多江子、永井優美、加藤ひとみ
2．発表標題 学生の実習に対する意識と成果について(2) 保育者の言葉かけの視点から
3．学会等名 日本保育学会
4．発表年 2016年

1．発表者名 永井優美
2．発表標題 豊明幼稚園における甲賀ふじの保育実践 - 幼小連携カリキュラムを手がかりに -
3．学会等名 日本カリキュラム学会
4．発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1．著者名 太田素子・湯川嘉津美編	4．発行年 2021年
2．出版社 萌文書林	5．総ページ数 344
3．書名 幼児教育史研究の新地平－近世・近代の子育てと幼児教育－上巻	

1．著者名 Edited by Shin'ichi Suzuki et al.	4．発行年 2021年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 422
3．書名 The Routledge Encyclopedia of Modern Asian Educator 1850-2000	

1．著者名 アメリカ教育学会編著	4．発行年 2021年
2．出版社 東信堂	5．総ページ数 307
3．書名 現代アメリカ教育ハンドブック	

1. 著者名 橋本美保・田中智志編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 457
3. 書名 『大正新教育の実践 交響する自由へ - 』	

1. 著者名 福山多江子・伊澤永修・大澤洋美・生野金三編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 157
3. 書名 『0～6歳児「言葉を育てる」保育 - よくある疑問40&言葉あそび20』	

1. 著者名 橋本美保・遠座知恵・角谷亮太郎・塚原健太・永井優美・宮野尚	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 336
3. 書名 大正新教育の受容史	

1. 著者名 幼少年教育研究所編	4. 発行年 2016年
2. 出版社 鈴木出版	5. 総ページ数 438
3. 書名 保育実践事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------